

強度行動障害の支援に関する探索的研究

－支援者への面接を通して－

蓬 菜 暁

問題と目的

強度行動障害（直接的他害、間接的他害や自傷行為などが、通常考えられない頻度と形式で出現し、その養育環境では著しく処遇の困難なものを言い、行動的に定義される群で医学的には、自閉症、トゥレット障害、精神遅滞などが含まれる）の支援にあたっては、施設内での QOL を高める重要性、施策・制度における更なる改善、地域へと展開する方向性を持ち続けること、職員配置基準・養成の遅れ、施設利用者の突然の変化による支援者の動揺、余暇活動を支援していく重要性など多くの課題が指摘されている。しかし、これまでの研究では、現場における支援者の上記の課題への具体的な取り組みや捉え方などについての研究はなされていない。

そこで、本研究では強度行動障害の支援に携わる支援者を対象にインタビューを行い、支援者の語りを基に、強度行動障害の支援のあり方、問題点、課題、限界、今後の展望などさまざまな側面からの考察を行うことを目的とする。

方法

インタビュー内容は、先ほど述べた課題をもとに作成し、支援者への半構造化面接の形を取る。

結果と総合的考察

インタビュー内容より得られた解答をまとめて、「1) 強度行動障害の特性」、「2) 支援者の QOL の捉え方」、「3) 支援のあり方」、「4) 支援にかかわる者の気をつける点」、「5) 支援者の戸惑い・恐怖その他の感情」、「6) 地域への展開に関わる諸問題」、「7) 制度上の問題」の7つのカテゴリーを得た。

支援に関しては、「障害特性に即した支援」が、第一であると考えられた。そのためにも支援者は、自閉症、トゥレット障害、精神遅滞といった強度行動障害に関わる各障害の特性の理解が必要になってくる。

脱施設化が叫ばれる中、まず、地域住民の理解が求められる。そして、脱施設化を進めていくにあたっては、地域と入所施設の連携協力がますます重要になってくるだろう。

また、支援者のストレスマネジメントも重要になってくると思われた。さらに、これまで指摘されていた支援者の動揺以外にも、支援者は苛立ちや恐怖といった感情を持っていることもわかった。そして、臨床心理学的な視点から強度行動障害の人の特性やストレスの把握、支援者のストレスケアなど具体的なアプローチを検討する必要もあるだろう。

今後の課題

対象施設では支援技法などが支援者の間である程度統一されており、偏ったインタビューの語りであったかもしれない。今後は、対象施設を増やしていくことが必要であろう。

本研究で得られた7つのカテゴリーはあくまでも大枠での強度行動障害に関わる問題・課題といえる。強度行動障害への支援をよりよくするためにも、今後はカテゴリーごとに深化させた研究が必要だろう。